

1877年刊『使徒行傳の話』の 語彙とりわけ字音語の分析

— 明治初期の口語体ひらがな専用キリスト教入門書にみる訳語の特徴 —

松 本 隆

Vocabulary Analysis of *Shito Gyō Den no Hanashi* (*The Story of the Apostles*) in 1877 :

On Word Choice, Especially Chinese Origin Words, in The Primer Handbook of Christianity Translated into Spoken Japanese and Written Exclusively in the Japanese Syllabic Alphabet

Takashi MATSUMOTO

The primer handbook of Christianity, *Shito Gyō Den no Hanashi*, was translated from the English book, *The Story of the Apostles*, and published in 1877 in Kobe. It introduced a plain spoken Japanese after the English original style and was written exclusively in *Hiragana* (the Japanese syllabic alphabet). Even though this experimental publication excluded all *Kanji* (Chinese characters) from the text, there remained many *Kango* (Chinese origin words), written in the Japanese syllabic alphabet. This paper analyzes the book's vocabulary, especially Chinese origin words, compared with that of "The Acts of the Apostles" in two contemporary Japanese bibles. Utilizing a dictionary of Chinese origin words published in the same period, this paper argues two points. First, the translators of *Shito Gyō Den no Hanashi* often choose different words from two other bibles' for the same things. In such cases, the former tends to select naturalized Chinese origin words in everyday use, as well as *Wago* (native Japanese words). Second, even when these three texts use the same words, differences in usage are observed in a few cases. Some of the basic words in *Shito Gyō Den no Hanashi* express a wider

range of meaning than the other two bibles.

要 旨

1877 (明治10) 年に『使徒行傳の話』というキリスト教の入門書が神戸で翻訳出版された。英語の原作の雰囲気を通俗平易な談話調の口語で写し取った文体と、平仮名だけで全文を表記した点が、明治初期の実験的な翻訳作品として注目される。漢字をいっさい使わない本書であるが、漢語まで廃した訳ではない。平仮名表記の漢語 (字音語) に焦点を絞り、本書が用いる語彙の実態を探るべく、同時代に出版された聖書の使徒行伝2種と比較し、また当時の漢語辞書を参照しつつ、検討したところ主に次の2点を確認した。まず、本書と他2書は同じ物事に対しそれぞれ別の訳語を用いることがある。そのような場合、本書が和語でなく漢語を使うとすれば、口語化し日常会話で多用する漢語を選択する傾向がある。次に、本書が他の聖書と同じ語を用いるときでも、指し示す内容や、使用範囲が異なる場合がある。本書では基本的な日常語を広範囲に使う事例が観察された。

1. 平仮名で書かれた漢語の層

ここに取り上げる『使徒行傳の話』は、英国の Favell Lee Mortimer 著『*The Story of the Apostles; or, The Acts Explained to Children*』を種本とし、アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の宣教師ジュリア・ギューリック (Julia Ann Eliza Gulick, 1845 ~ 1936) が中心となって1877 (明治10) 年に神戸で翻訳 (部分的に翻案) し出版したキリスト教の入門書である (松本2013)。

厚紙の表紙に『使徒行傳の話』という題箋が貼られた洋装・活字印刷の本書には序文や目次がなく、第1頁は平仮名の書名「しとぎやうでんのはなし」に続き「[第一章] ゆだのかわりをゑらぶこと 使徒行傳一章十二節より」という章の標題のもと、さっそく次のような本文が始まる。「いゑすすくひぬしがてんにおのほりなされたあとでじうにのでしたちのなされたいろ〜のことをかひたほんをしとぎやうでんとまうしまして。あのるかでんをかひたるかといふひとのかひたほんでござります。このひとはじうにでしのうちではありま

せなんだなれど。せいいいのおんみちびきによつていろ〜のことをまぢがひなくかきました。これからだん〜じゅんつぎにおはなしまうませふ。さて…」。

「さて」以降、使徒行傳1章後半部分の概要つまり「ゆだ」に代わって「まつてや」が「じうにでしのいちにん」に選ばれるくだりが、上と同じような丁寧なマス体で語られていく。文末の「ござります／ました／ませふ」や、文中の「…まして…／（…ではあり）ませなんだ（なれど…）」は、当時の丁寧な話し方を反映している。「ませなんだ」は「ませんでした」が一般化するまで、丁寧な過去の否定表現として広く用いられた言い方である（『日本国語大辞典』第2版「ませなんだ」の語誌参照）。話すように書く、談話調の言文一致を志向していることがうかがわれる。

このように本書は、読者に話しかけるような文体で、しかも視覚によって意味の識別が可能な漢字に頼ることなく、表音文字である平仮名だけで記述している。口頭言語寄りの書き言葉、つまり言文一致のひとつの形態を実践しており、表記と文体のありかたを明治初期の世に問うた作品とみなすことができよう。

英語の原文も、読者に語りかけるような筆致で綴られ、邦訳は英語原書全体の内容・雰囲気をはほぼ忠実に日本語読者に提供している。しかし邦訳は、原文に一言一句まで忠実であるよりも、日本の読者にとって受け入れやすいよう随所に加工を施している。原作に見られない「これからだん〜じゅんつぎにおはなしまうませふ」も、そのひとつである。このような日本の読者向けの加筆、また逆に削除や要約などが散見される。

聖書の翻訳と異なり、聖書の内容を紹介した入門書（再話もの）の翻訳には、聖書翻訳のような厳密さは求められない。聖書の翻訳では、訳語ひとつでも選択の幅が厳しく限られるが、入門書では盛り込む内容も含め、用語の選択など、自由裁量の幅が広い。『*The Story of the Apostles*』は基本的に使徒行傳の再話であるが、その内容を取捨選択しつつ、黙示録やコリント書の内容を加味するなどして、読者の興味を引きつける工夫をこらしている。このような英語原作を、比較的自由的な訳出姿勢で日本語に移し換えた『使徒行傳の話』は訳語選択の制約が、少なくとも聖書翻訳の場合よりも、緩かったものと想像できる。

用字と用語は密接な関係にあり、聞いてわかりにくい漢語（字音語）は、

平仮名で見ても当然わかりにくいので、言い換える必要が生じる。例えば「使徒」や「行伝」という漢語を知らない人が「シトギョーデン」という音声を耳にしたり「しとぎやうでん」という仮名を目にしても、とっさには意味が把握できない。そこで先の引用の第1文では「しとぎやうでん」を「じうに の でしたち の なされた いろ〜 の こと を かひた ほん」と言い換えることで「シトギョーデン」がいかなる本であるかを、まず読者に解説している。語としては「使徒」を「(十二) 弟子」に、「…伝」を「本」に言い換えていることになる。

上の4語つまり「しと、ぎやうでん、でし、ほん」は、平仮名に漢字を当てると、どれも音で読む字音語として一括できるが、「使徒」や「…伝」よりも、「弟子」や「本」のほうが、より日本語に馴染んだ語として意識されていたことが、解説される側と、解説する側の関係から読み取れる。

漢語は大別して、おもに書き言葉で用いる硬い漢語と、日常会話で常用されるくだけた漢語の、少なくとも2つの層を想定できることが、以前から指摘されてきた(今野 2011: 42-47, 58-59)。亀井ほか編(1965: 309)は、人々の口に馴染んで日常語と化した後者を「俗漢語」と称した。

平仮名を専用する『使徒行傳の話』は、漢字表記を示す手立てを放棄したため、漢字の視覚的な意味識別力に頼ることができない。平仮名書きの字音語を本書が用いる場合、漢字に頼らなくても意味が通じる日本語に深く根ざした語を選んでいることが予想できる。実際、先の引用の最後の文にある「… だん〜じゆん つぎ に …」の「段々」や「順」も、音で読む漢字を当てることができるが、副詞の用法に転じていることから、深く日本語に定着した漢語とみることができる。

では先の引用の中ほどに登場する「セーレー」(せいれい、聖霊)の場合は、どうなのであろうか。引用文では「せいれい」に何の解説も加えず、自明の語のように用いている。文脈さえあれば「セーレー」という音声や、それを写した仮名だけで通じるという判断があつてのことなのだろうか。この点については、他の聖書の用語選択との比較において第4節で後述する。

では次節以降『使徒行傳の話』を、同時代に出版された聖書の使徒行伝2種類の語彙と見比べ、また当時の漢字辞典も参照しつつ、この本が使用する語彙の特徴を論じていく。

2. 使用する資料, 仮説, 分析方法

これより3書つまり, A)『使徒行傳の話』, B) 翻訳委員会訳 1880 (明治13) 年刊『新約全書』内「使徒行傳」, C) ネイサン・ブラウン訳 1880 (明治13) 年刊『志無也久世無志與』内「ししやの わざ」を比較検討しながら, A の語彙的な特徴を解き明かしていく。また各書の語彙の傾向を探るための参考資料として橋爪貫一編 1873 (明治6) 年刊『掌中漢語早引』を用いる。

聖書邦訳史における B と C の位置づけについては, 海老沢 (1989) や川島 (2008) などの先行研究に譲り, ここでは両書の用語と用字の特徴を簡単に概観しておく。B の『新約全書』は 1880 年に, それまでの分冊を 1 巻にまとめて出版された段階では, 漢字の多い黒っぽい字面になっているが, その多くは和語に漢訳聖書から借用した漢字列を当てたものである。それ以前の初期の分冊では, 平仮名の中にわずかに漢字を使用する程度であった (森岡 1991: 165)。また, C は書名こそ万葉仮名『志無也久世無志與』で記すが, 本文は平仮名を専用する。平仮名だけでは意味がわかりにくい語に限って, 振り漢字や, 振りローマ字を施している。「ししやの わざ」では, 例えば「時分 (1 章 7 節), 詩 (1 章 20 節), 舌 (2 章 3 節)」等の漢字を, 平仮名の本文の右傍行間に添えている。これらは平仮名の場合「自分, 死, 下」等と紛らわしい。

B も C も平易とはいえ文語による聖書の邦訳であり, 口語で入門書を訳した A とは文体が異なる。したがって A の訳語が話し言葉をより志向する可能性が高いという推論 (仮説) が成り立つ。他方, B が漢字を視覚的な語義識別の手段となしていることは十分に考えられる。

では次に, 分析の方法について述べる。この研究では A・B・C それぞれが用いる字音語をすべて抽出し, 頻度の高い語から順に用例数とともに表の形にして比較の便宜を図った。表 1 はその一部で, 上位の 30 語だけを示した。表は, 左・中央・右の 3 つの欄からなる。左は A, 中央は B, 右欄には C の高頻度語が上から並べてある。

表には, 名詞や動詞を中心とする自立語を載せた。音と訓を組み合わせた重箱読みや湯桶読みの語も含めた。高頻度であっても, 数詞 (例えば「四十」), 助数詞 (…人), 付属語 (…人/…時) などは除いた。ただし「千人 (の長)」「百人 (の長)」「異邦人」などは普通名詞として表に含めた。

AとCは平仮名を専用するので、表1のAとCの漢字は、Bの漢字表記を参照しつつ、稿者が妥当だと思ふ漢字（A～Cとも現行の字体）を当てた。

例えば表の左欄1番のところに、Aが最も頻用する字音語「しんじや」を掲げ、漢字として「信者」を当てた。続いて、Aの使用回数84回、聖書Bの6回、聖書Cの7回、つまり延べ語数を示した。マイナス記号は用例なし（0回）を意味する。語頭にマル「○」印を付した項目、例えば8番Aの「一緒」は『掌中漢語早引』の見出し語句の中に当該の語がみえることを示す。

『掌中漢語早引』は、明治初期に数多く出版された漢語辞書の1つである。これは、和語などの平易な見出し項目から、それに相当する硬い漢語が引ける辞書である。見出し項目は和語を多用するが、中には平易な漢語つまり「俗漢語」を見出しに掲げる場合もある。○印の語は口頭言語化した漢語であることを示唆する指標として利用できる。なお、この辞書の記載は例えば「ぢんや 陣營^{じんえい}」（陣屋⇒陣営、次節参照）のような対訳語の形式が多いが、「ぶきやうのやくしよ 鎮臺^{ちんたい}」（奉行の役所⇒鎮台）のように説明的な語句が字音語を導く例もある。後者のような場合も「奉行」（第7節参照）に○印つけた。

3. 「俗漢語」が多い『使徒行傳の話』

まずA・B・Cが用いる字音語の全体的な傾向を大づかみにするため、○印の多寡に注目し、語彙の柔らかさ硬さを探ってみよう。

A全体を通して4回以上登場する64語中「○」がつくのは15語である。漢字の形で示すと「一緒、講釈、役人、大層、相談、承知、貧乏（人）、陣屋、親切、本、悪事、悪魔、案内、格別、難儀」となる。このうち「陣屋」は音と訓を組み合わせた重箱読みである。なお「陣屋」は、前節で例示したように「陣営」と類義の関係にある。AとCが通俗的な「陣屋」を、Bが硬い「陣営」を選んでおり、各書の訳語選択姿勢をうかがわせる好例である。

Bに4回以上登場する59語中「○」がつくのは「先祖」と「約束」の2語にすぎない。同じ条件でCは75語中「先祖、約束、大勢、不思議、奉行、死人、悪魔、下役、親類、人間、家内」の11語が相当し、うち

【表 1】『使徒行傳の話』ほか 2 書が多用する字音語の比較

	A 『使徒行傳の話』			B 『新約全書』			C 『志無也久…』				
	A	B	C	B	A	C	C	A	B		
1. 信者 <small>しんじや</small>	84	6	7	主 <small>しゆ</small>	97	15	—	兄弟 <small>きやうだい</small>	61	12	55
2. 使徒 <small>しと</small>	49	31	—	兄弟 <small>きやうだい</small>	55	12	61	信 <small>しん</small> ず	41	37	41
3. 自分 <small>じぶん</small>	41	—	—	聖靈 <small>せいれい</small>	42	19	—	預言 <small>よげん</small>	38	5	32
4. 信 <small>しん</small> ずる	37	41	41	信 <small>しん</small> ず	41	37	41	使者 <small>ししや</small>	36	—	—
5. 牢屋 <small>ろうや</small>	26	—	23	異邦人 <small>いほうじん</small>	33	5	—	天 <small>てん</small>	34	18	29
6. 王 <small>わう</small>	22	21	23	預言 <small>よげん</small>	32	5	38	弟子 <small>でし</small>	32	4	31
7. 兵隊 <small>へいたい</small>	20	—	—	使徒 <small>しと</small>	31	49	—	命 <small>めい</small> ず	31	1	29
8. ○一 <small>いつ</small> 緒 <small>しよ</small>	19	—	—	弟子 <small>でし</small>	31	4	32	異人 <small>いじん</small>	29	—	—
9. 聖靈 <small>せいれい</small>	19	42	—	天 <small>てん</small>	29	18	34	地 <small>ち</small>	29	7	28
10. 天 <small>てん</small>	18	29	34	命 <small>めい</small> ず	29	1	31	○先祖 <small>せんぞ</small>	26	1	26
11. 会堂 <small>くわいどう (だう)</small>	16	23	23	地 <small>ち</small>	28	7	29	牢屋 <small>ろうや</small>	23	26	—
12. 主 <small>しゆ</small>	15	97	—	○先祖 <small>せんぞ</small>	26	1	26	王 <small>わう</small>	23	22	21
13. 信仰 <small>しんかう</small>	15	9	12	祭司 <small>さいし</small>	24	8	—	会堂 <small>くわいどう</small>	23	16	23
14. 福音 <small>ふくいん</small>	13	13	5	会堂 <small>くわいどう</small>	23	16	23	少将 <small>せうしやう</small>	20	—	—
15. 兄弟 <small>きやうだい (ふ)</small>	12	55	61	王 <small>わう</small>	21	22	23	教会 <small>きやうかい</small>	18	9	17
16. 門 <small>もん</small>	12	11	13	千人 <small>せんにん</small>	20	2	2	百人 <small>ひやくにん</small>	15	—	15
17. ○講 <small>かう</small> 積 <small>しやく</small>	10	—	—	教会 <small>けうくわい</small>	17	9	18	坐 <small>ざ</small> す	14	—	10
18. 聖書 <small>せいしよ</small>	10	7	—	百人 <small>ひやくにん</small>	15	—	15	死 <small>し</small> (す)	14	3	7
19. 教会 <small>きやうかい</small>	9	17	18	食 <small>しょく</small> す	13	—	12	○大勢 <small>おほせい</small>	13	—	1
20. 天国 <small>てんこく</small>	9	—	—	福音 <small>ふくいん</small>	13	13	5	門 <small>もん</small>	13	12	11
21. 方 <small>ほう</small>	9	—	—	長老 <small>ちやうらう</small>	12	—	—	○約束 <small>やくそく</small>	13	3	9
22. ○役人 <small>やくにん</small>	9	—	—	兵卒 <small>へいそつ</small>	12	5	10	子孫 <small>しそん</small>	12	—	10
23. 祭司 <small>さいし</small>	8	24	—	門 <small>もん</small>	11	12	13	食 <small>しょく</small> す	12	—	13
24. 裁判 <small>さいばん</small>	8	4	5	割 <small>かつれい</small> 礼 <small>れい</small>	10	1	12	信仰 <small>しんかう</small>	12	15	9
25. ○大層 <small>たいそう</small>	8	—	—	坐 <small>ざ</small> す	10	—	14	出帆 <small>しゅつぱん</small>	12	—	—
26. 段々 <small>だんぜん</small> と	8	—	—	子孫 <small>しそん</small>	10	—	12	割 <small>かつれい</small> 礼 <small>れい</small>	12	1	10
27. 魔法 <small>まほう</small>	8	—	3	信仰 <small>しんかう</small>	9	15	12	○不思議 <small>ふしぎ</small>	11	3	4
28. 悪人 <small>あくにん</small>	7	—	—	数人 <small>すにん</small>	9	—	7	論 <small>ろん</small> ず	11	—	7
29. ○相談 <small>さうだん</small>	7	—	—	○約束 <small>やくそく</small>	9	3	13	兵卒 <small>へいそつ</small>	10	5	12
30. 地 <small>ち</small>	7	28	29	安息日 <small>あんそくにち</small>	8	3	—	帰 <small>き</small> す	9	—	4

「大勢」と「下役」は訓と音を組み合わせた湯桶読みである。「下役」は『掌中漢語早引』で「したやく」として立項され、読み（語形）にズレが認められる。

以上のようにA・B・Cを比べると、予想どおり「俗漢語」はAに多く、Bに少ない。Cはその中間といえることができる。

4. 具体例の比較その1「主、聖霊、異邦人、使徒」

表1から特徴のある語を取り上げ具体的に検討していく。まず、BとCの高頻度語から見比べてみよう。Bの上位7語のうち「主」と「聖霊」は聖書の最重要語といってよく、また「異邦人」と「使徒」は行伝に欠かせない。ところが、これら4語はCに一度も登場しない。逆にCが4番目に多用する「使者」をBは一度も使わない。書名にもBは「使徒」を、Cは「使者」を採用しており、訳語の選択方針が明確に反映されている。

Bは「シシャ」という語は用いないが「使者」に傍訓「つかひ」を施した漢字列を天使の意味で使用する。例えば12章7節に「時に主の使者来りければ光獄の中に照輝その使者ペテロの脇を拊て之を醒し速かに起よと曰しに鍾その手より脱たり（波下線のみ稿者による）」とある。続く8節は「使者かれに曰けるは爾帯をしめ履を納よペテロその如せり天使また曰けるは爾の袍を身に纏て我に従へ」とあり、同一の存在に対して「使者」と「天使」を併用する。後者と同じ漢字列に6章15節では「天使」という別の傍訓が施され、また「天の使者」（7章53節）や「神の使者」（10章3節）という形も見える。いずれにせよBにおいて「使徒」と「使者」は指示対象の異なる別の語である。

さてCでは、Bが多用する「主の使者」でなく「てんのつかひ」や「かみのつかひ」を使うことが多い。また呼びかけの「主よ（爾はいま…）」を、Cでは「きみよ（、あなたはいま…）」（1章6節）としている。さらにCは「聖霊」を「きよきみたま」、「異邦人」を「いじん（異人）」とする。

Aが以上の4語「主、聖霊、異邦人、使徒」をどう扱っているかを見てみよう。Aの書名にも含まれる「使徒」は、Bと同じく登場機会が多い。また「聖霊」もBほどではないが頻繁に登場する。Aに「聖霊」が最初に登場するのは本稿の第1節で引用したAの冒頭部であるが、それ以降も語釈を加えることなく自明の言葉として用いている。「聖霊」の代わり

にCが用いる「(きよき) みたま」は、Aにも1度だけ「いゑす の おんことば」の引用として「ひとはみづとみたまによりてうまれねばてんこくにいることかなはじ」(21頁)という文中にのみ登場する。

Aにおける「主」^{しゅ} 15例は、単純な使用回数でこそ「聖霊」の19例と大差ないように見えるが、Bの用例数との比率は両語間で大きく異なる。「聖霊」がA19対B42例で2倍強の差でしかないのに対して、「主」はA15対B97例で6倍半もの差が開いている。これは、Bが「主イエス(キリスト)」や「主の使者」という定型化した言い方を多用するためである。それに加え、Bが「主」^{しゅ} を使用する場面状況の一部で、Aが「かみ(さま)」を用いることも影響している。

Bが「主」^{しゅ} を、Aが「かみ(さま)」を使う例を2箇所みてみよう。まずBの5章9節「爾曹心を合せて主の霊を試るは何ぞや」に相当する箇所では「つまもまたおつとのやうにかみをいつはりこゝろむるか」(11頁)としている。ちなみにCは同じ節を「なんぢらともにはかりてきみのみたまをこゝろみるはなんぞや」と訳している。また22章21節(Aの34頁)では、A「かみさまはまた「とほくよそくににゆきそこにてみちをつたへよ」とおほせられました」、B「主われに曰けるは往われ爾を遠く異邦人に遣すべし」、C「きみわれにいへり、ゆけ、われなんぢをとほくいじんにつかはさん」となっている。つまりBが「主」^{しゅ} を、Cが「きみ」を用いる領域の一部に、Aの「かみ(さま)」が入り込み使用範囲を拡張していることになる。

では次に「異邦人」に目を移してみよう。上の22章21節におけるBの「異邦人(に遣すべし)」とCの「いじん(につかはさん)」に相当するAの表現は「よそくに(にゆき…)」となっている。このような言い換えが、Aに「いほうじん」が少ない理由である。Aの別の箇所では「よそくにのもの／よそくにのひと／よそくにびと」という和語が「異邦人／いじん(異人)」の代わりに登場する(注1)。

以上、Bに頻出する「主、聖霊、異邦人、使徒」の4つの漢語に関し、Cも視野に入れつつ、Aがどう表現しているかを観察した。4語のうち「異邦人」の使用についてAは消極的であり、またCが用いる漢語「いじん(異人)」も避け、和語による言い換えを進めている。そして「主」について、AはBほど多用せず、日常語の「かみ(さま)」を「主」の代わりに用い

る場合が見られる。いっぽう「使徒」と「聖霊」は和語などで言い換えることなく、そのまま使用している。聖書用語として漢語の形態を保持・継承したものと思われる。

5. 具体例その2「先祖、子孫、割礼、不義、食物、食す」

この節では、B・Cとも比較的よく用いるが、Aの使用例が（ほとんど）見られない語として「先祖、子孫、割礼、不義、食物、食す」等を取り上げる。ある語を使わない理由として、別の語で言い換えているか、その語を使う文脈・話題を省略している、という2つの可能性が考えられる。

「先祖」と「子孫」は後者の例で、これらに相当する別語で代替しているのでなく、両語を必要とする話題そのものをAは扱っていない。「先祖」と「子孫」は民族の歴史を語る場面（旧約聖書の内容に言及する箇所など）でよく用いられるが、Aはそのような場면을割愛している。

また「割礼」についても、聖書の使徒行伝15章1節に相当する59頁で、ただ1度だけ使用するにすぎない。

「不義」も端折られがちだが、24章21節に相当する104頁では「あしきこと」と言い換え、また25章10節に相当する107頁では「むほんなど」と敷衍的な言い方をしている。

「不義」と対になる「義」を、Aは1度だけ13章39～40節に相当する54頁で次のように用いている。「このすくひぬしをしんずるならばもうせのおきてにてぎとせられぬこともそのつみはゆるされたゞしきものとなられるゆゑ、はやくいゑすのみちにおしたがいなされ」。Bでは、上の「ぎ」と「たゞしきもの」の両方を「義」としている。Aは9頁（4章19節に相当）でも「たゞしきもの」を「義」に代用している。単音節の字音語は、耳からは意味を捉えにくい場合が多い。Cは振り漢字を、単音節語にしばしば施し、視覚的な理解の助けとしており、また「ぎ」の使用は避けている。

「食物」の代わりに、Aは73頁で「たべもの」を用いたり、Bが16章34節で「かれらを己が家に引來り食物を其前に備…」としているところを、説明的に「ふたりをわがいへにつれかへり、いろ〜とふるまひをなし」（66頁）と訳している。Aでは当該語を用いる場面が省かれていたりもするが、「たべもの」と「ふるまひ」はともに聞いてわかりやすい和

語である。

続いて「食す」(食する)の言い換え例を紹介する。まずBの10章13～14章は「かつありて彼に曰けるはペテロよ起て之を殺し食せよ ペテロ答けるは主よ可らじ我いまだ穢たる物と潔からざるもの物を食せしことなし」となっている。これに相当するAの38頁は「またてんからこゑがして「ペテロよなんぢそのなかにあるものをおそれずくらへ」とありました。ペテロこたへて「しゆよわたくしはうまれたときよりけがれたものをたべたことはありませぬ」といひましたら」とされている。このようにAでは、「てん」は「ペテロ」に対し「くらふ」を、また「ペテロ」は「てん」に向かい「たべる」を用いている。話し言葉らしい立場による使い分けが和語で表現されている。一方、Bはどちらにも「食す」を用い、中立的な表現になっている。

「食す」と同種の一字漢語動詞である「論ず、命ず、坐す」(論じる、命じる、坐する)も、Aは避けている。これらは書き言葉向きの語であり、談話調口語体のAには不釣り合いである。

6. 具体例その3「信者、自分、兵隊、一緒、講釈」

この節では、表1左欄のA上位のうち他書BとCが(ほとんど)使用しない「信者、自分、兵隊、一緒、講釈」の5語を取り上げる。「一緒」と「講釈」は○印つきの「俗漢語」であり、談話調口語体と相性がよさそうである。Bでは、「一緒に」の代わりに「偕ともに」を、「講釈する」の代わりに「語かたる」や「講かたる」といった和語を用いた事例が目を引く。Aが柔らかな漢語を、Bが硬質な和語を選んでいることになる。またBは「論ず」も「講釈する」の意味で用いている。いっぽうAは、前節の最後に触れたように「論ず」(論じる)を避けており、語の性格分けが画然となされているようである。

Aの「自分」に当たる語として、BやCが用いるのは「己おのれ」であるが、Aの「自分」ほど多用しない。「自分」と「己」についても、Aの身近な漢語、B・Cの硬質な和語、という対応関係が見られる。

Aの「信者」は、B・Cが「信者、弟子、兄弟」を使う場面にまで入り込んでいる。基本的な語を広く使う例とみることができる。

Aの「兵隊」に当たるB・Cの語は「兵卒」である。古くからある「兵

卒」に対し、新たに広まった前者のほうが「俗漢語」寄りと思われる（注2）。

7. 具体例その4, 裁判に関する語

使徒行伝は、捕らわれの身となった使徒らが裁かれる諸々の場面を伝えている。この節では、裁判をめぐる語句に注目する。

Aは、現代の司法用語に通じる「裁判」という語を8回使っており、うち4例が「裁判する」という動詞形、2例が名詞の「裁判」に「…をする／…を始める」が続く形、さらに「裁判人さいばんにん」が2例みえる。他方BとCには「裁判（を）する」という動詞はなく、Bは「裁判所」3例と「裁判人」1例の計4例、Cは前者4例と後者1例の計5例、いずれも複合名詞の形だけを用いている。Aは、BとCにない動詞形をもち用法がこなれ、質的にも量的にも現代語の「裁判」の用法に近いように見える。

しかしAが邦訳で想定する「裁判」の場面は、近代的な法廷でなく、前代の「白洲しらす」における「裁きさば」の場面である（ちなみにBは25章10節で「審判さばき」と「審さばき」の表記を併用）。例えばA103頁の24章1節に相当する箇所には「ぺりくすは ばうろを またせてをいて ゆるされむにある さいしらをよびたいけつをさせやうとしましたが、いつかたちでのちみなそろひましたゆゑ、ばうろを しらすへよびだし さいばんをはじめました」とあり「白洲」で「裁判」をしたことになっている。また類例として107頁の25章4～7節に相当する箇所は「そのとき べすとすのまをしますに「それなれば かいざりやにかへりてからわが ばうろを さばくとき、なんぢらも しらすへで、そのものあくじをのべよ」といひをき かいざりやにかへりましてから ばうろをろうやよりひきいだし ゆだやびとをともにそのばにをき だん〜たゞしましたれば」とあり、やはり「しらす」に「ひきいだし」で「あくじ」を「たゞし」「さばく」という邦訳がなされている。

この引用103頁の「ぺりくす」と107頁の「べすとす」の肩書きを、A・Bとも「つかさ・方伯つかさ」と訳し、現代の新共同訳は「総督そうとく」と呼ぶが、Cは訳語に「奉行ぶぎやう」を当てている。Aの「白洲」にせよ、Cの「奉行」にせよ、聖書の世界を江戸に引きつけるような訳し方である。またAの「牢番らうばん」は「脇差わきざし」（65頁）を携行しているが、Bの「獄吏ひとやもり」とCの「牢番らうばん」

の場合は中立的な「^{かたな}刀」(16章27節)である。さらにAには、BやCが用いる「^{じやうこく}上告」(25章11～12節など)がない。

1872(明治5)年に本邦最初の裁判所構成法ともいうべき「司法職務定制」が定められて以来、日本は裁判制度の近代化を図っていた。Aの出版年は1877年であるから、近代的な裁判用語を訳語に取り込むこともできたはずだが、Aは将来一般化するであろう裁判に関する近代的な漢語を先取りするのではなく、すでに人々の耳に馴染んだ、実感を伴った過去の語彙と情景を邦訳に反映させている。

8. 平仮名専用という表記の可能性

以上、B・Cふたつの聖書との対比において、A『使徒行傳の話』の語彙の特徴を探ってきた。談話調口語体のAは、予想(仮説)に違わず、話し言葉で用いる語を積極的に用い、字音語は「俗漢語」寄りの耳に馴染んだ語を選んでいることが分かった。また訳し方の基調として、読者に身近な状況を想定し、原文の内容を読者の側に引きつける事例が観察された。

AとCは平仮名を専用し、Bも分冊の初期段階では平仮名を表記の中心とした。しかしBは合巻に至る段階で漢字を大幅に増やし、またAやCの平仮名専用文は試みの範囲を出ることなくやがて頓挫することになる。では、漢字に頼らず表音文字だけで日本語を綴ることに合理性がないかという点、そうとも言いきれない。

日本語は漢字仮名交じり文で書くものと思い込んでいる現代人が『使徒行傳の話』を目にしたとき、おそらく多くの人は異様な印象を懐くか、幼児向けの読み物と了解するであろう。確かに英語原本は副題に「…*Explained to Children*」とあり児童書なのであるが、邦訳は漢文脈に馴染みのない低識字層を読者に想定しこそすれ、子供だけに限定した出版物とは考えにくい(注3)。新たな時代にふさわしい書き言葉のあり方を模索していた明治前半期、用字・用語・文体の改革を目指した主張と実践が様々に試みられた。本書もその一事例と位置づけられる。

最後に素朴な個人的印象を述べると、本書の平仮名専用文は読み始めこそ違和感を覚えるが、読み進むうちに平仮名専用文であることを忘れ、内容に没頭することができる。平易な入門書であるから、できたことかもしれないが、我々が選択しなかった、もう一つの日本語表記の可能性を本書

は示唆している。

注

【注1】第4節について、原作の英文は「Why did you agree together to tempt the Spirit of the Lord?」（第V章）、「But the Lord still said, “Deaprt, for I will send you far away to the Gentiles.”」（第XVI章）となっている。邦訳書Aは、この英語原文や聖書Bの「主」「異邦人」と異なる平易な「かみ（さま）」「よそくに」を選んでいる。

【注2】第6節。1891年刊『言海』は「自分」を国語漢字表記の語として扱い、また同版で無印だった「己」は後の1935年刊『大言海』において古語を示す記号が追加された。いっぽう「兵卒」に関し『大漢和辞典』は中国の傳玄（217～278年）から、『日本国語大辞典』第2版は1717年の『書言字考節用集』から例を引く。「兵隊」の用例は『大漢和』になく、『日国』は初出例として、『輿地誌略』1826年を示す。佐藤亨『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』は「兵隊」を、幕末・明治初期という時代を象徴する重要な語（序文より）の1つとして『輿地誌略』ほかの用例とともに同辞典に所載する。つまり『使徒行傳の話』は、古風な「己」や伝統ある「兵卒」でなく、日本独自の漢語「自分」や新たに広まった「兵隊」を選んだことになる。

【注3】第8節。『使徒行傳の話』が出た翌1878年にアメリカン・ボードがおなじ装丁おなじ平仮名活字で上梓した『舊約聖書の話』の出版を報じる以下の記事が『七一雑報』明治11年11月8日3面上段「教會新報」欄に載っている（原文は「升」を除き総ルビ）。「今般神戸にて舊約聖書の話と云本が出来ましたが是はライン、アッポン、ラインと云書から翻訳した舊約聖書の話にて易ひ語を平仮名にて書し本は西洋綴にて所々に銅板の畫が入れてあり至極解易くて面白善き本でござり升定價は一冊二十五錢弊社にも相生町の高橋にもござり升」。この文面を見る限り、年少者に読者を限定した出版物とは考えにくい。なお『舊約…』の英語原著『Line Upon Line』も『使徒…』と同じモティーマー夫人の作品であり、同ボードは平仮名専用キリスト教入門書のシリーズ化を計画していたのではないかと推測される。

参考文献

- 海老沢有道（1989）『日本の聖書：聖書和訳の歴史』講談社（講談社学術文庫）
 亀井孝ほか編（1965）『日本語の歴史（6）新しい国語への歩み』平凡社
 今野真二（2011）『漢語辞書論攷』港の人
 川島二郎（2008）『ネイサン・ブラウンと「志無也久世無志與」』（志無也久世無志與別冊）新教出版社
 ギュエリック、ジュリア（1877）『使徒行傳の話』（同志社大学図書館蔵書、松本2013に電子化テキスト全文あり）
 橋爪貫一編（1873）『掌中漢語早引』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）

- 翻訳委員会訳編（1880）『新約全書』（『近代邦訳聖書集成（3）新約全書』ゆまに書房 1996年複製）
- ブラウン、ネイサン訳（1880）『志無也久世無志與』（秋山憲兄監修『志無也久世無志與』新教出版社 2008年複製、川島二郎監修『新約全書：現代仮名字体版『志無也久世無志與』』新教出版社 2011年）
- 松本隆（2013）「1877年刊『使徒行傳の話』テキスト電子化と解題：明治初期の口語体ひらがな専用キリスト教入門書」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『日本研究センター教育研究年報』第2号
- 森岡健二（1991）『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院、うち161～206頁の第6章「新約聖書の和訳」

